

## 「2023年中国・浙江大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学文学部2年 池田 周作

①今回の派遣プログラムで培った能力は2つある。1つは中国語を基礎としたコミュニケーション能力で、もう1つは多角的な物事のみかたである。前者に関して自分は中国語初心者だったということもあり、未熟なコミュニケーションしか取れなかった。しかし身振り手振り、英語や翻訳機を駆使してなんとかやり取りを済ませることができた。そして留学後半には中国語も単語レベルであるが、聞き取れるようになった。後者は主に中国人との違いにて学ぶところが大きかったが、私が所属していた言語のクラスには様々な国籍の人がいて彼らから様々な価値観を教えられた。例えば日本と中国以外の国では漢字を使う文化がないため、多くの生徒はピンインでの表記を好んでいた。食文化でも中国は少し残して食事を終えるのがマナーとされており、実際にそれを行う人も多かった。

②  
中国留学での経験としては、第一に言語の壁を痛感した。自分はバイト先で中国人を相手にすることが多いが、彼らの多くは英語が流暢であり、中国でも英語で十分通じると錯覚していた。しかし日本に海外旅行できる人たちが英語が流暢なだけであり、実際の市井の中国人はまったくと言っていいほど中国語が通じなかった。また中国でのネット環境は独特で google 系のアプリが vpn を通さないとほとんど使い物にならず、かなり不便さを感じた。一方中国で十分に満喫したのは中華料理である。花山椒を基調とした中華料理は辛い病みつきになる味が多く日本に帰ってから恋しくなるほどであった。また値段も日本に比べてかなり抑えめであり、太る原因になっていた。

③  
中国での語学の授業は初心者コースに振り分けられていた。初心者コースは午前中に授業を行っており、規則正しい生活を手助けしてくれた。授業は多国籍の生徒と混じって行われピンインを中心とした授業であった。漢字がわかっている分、退屈な部分もあったが総合的に考えて学習の一助になったと思う。午後には学校指定のプログラムがある場合もあり、どれも中国への理解を深めるものとなっており、満足度は高かった。それ以外の時間は自由時間となっており、よい息抜きかつ旅の場になっていた。

## ④中国語への意欲、異文化への興味

今回のプログラムは全体的に今後の進路を決めていくうえでよい材料となった。まず中国語への興味関心がわいてきた。自分は第二外国語にフランス語を選んでおりすでに単位を取り切っているが、新たに中国語を初級から学びなおしてみる気になった。またそれまで中国はどこか危険にかかわらないほうがよい国との位置づけだったが、実際の中国に触れることで無用な警戒感は解かれたとおもう。これからは積極的に中国へのアンテナを張っていこうと思う。